瀬戸内哲学研究会 連続セミナー

現象学的アプローチの諸相

第一回　現象学とエスノメソドロジー

現象学者たちとの対話のために

エスノメソドロジストたちは どのような資料を使ってきたか

酒井泰斗（会社員、ルーマン・フォーラム）

本日のメニュー

1. 自己紹介
   a. 普段やっていること
   b. 現象学と私
2. 目標と予備考察
3. まえふり
   a. 現象学的社会学とエスノメソドロジー
   b. ハーヴィー・サックスについて
4. 本論：EMが使ってきた資料のバリエーション
5. 現象学者への宿題

1. 自己紹介

a. 普段やっていること

プロフィール、研究会、出版、ブックフェア

講師紹介1

- 会社員。ルーマン・フォーラム管理人。
- 某地方国立大学大学院理学研究科（物性物理学専攻）修士課程中退
- 音楽制作会社に4年ほど勤務ののち現在は金融系ベンチャー企業のシステム部に所属。プログラマからなるチームでWEBアプリケーションのデザインを担当。

■関心：

- 高校時代は「アートとテクノロジー」。
- 大学入学前～大学時代前期は 科学哲学・科学史、科学論。
- 大学時代末期は 社会科学の前史としての道徳哲学・道徳科学の歴史、社会科学における方法論争、行動科学史など。
- 2001～2002年頃からエスノメソドロジーを中心に、出版や研究会などの企画立案・開催に携わる。（次ページ）

講師紹介2

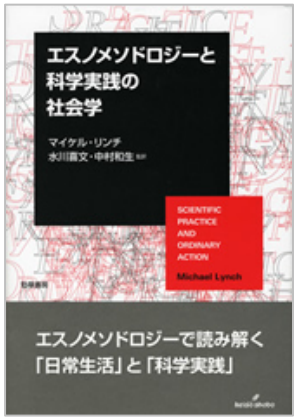
各種研究会の開催　http://socio-logic.jp/events/

イベント告知まとめ

- 「アレやったのいつだっけ？」って話になることが多いので、酒井が関与したイベントをまとめてみました。
- 個人の所属、肩書は告知時のものです。

日時／告知	イベント タイトル	登壇者	主催	会場	酒井担当
20180705	**加藤秀一** **単著執筆準備作業進捗報告会** 第８回	• 加藤秀一	酒井泰斗	明治学院	主催
20180630	**ニクラス・ルーマン研究会** 第21回研究会	• 齋藤 賢、佐藤剛生、坂井晃介、高橋 徹	ニクラス・ルーマン研究会	中大後楽園	呼びかけ人 司会
20180628	**AMSEA講義** 「制作・批評と言葉」第１回	• 講師：酒井泰斗	AMSEA	東大本郷	講義
201806xx	**北田暁大** **単著執筆準備作業進捗報告会** 第２回	• 北田暁大	酒井泰斗	東大本郷	主催
20180621	**鈴木生郎** **博士論文執筆準備作業進捗報告会** 第４回	• 鈴木生郎（分析形而上学）	酒井泰斗	明治学院	主催
20180616	馬場靖雄ゼミナール： **ニクラス・ルーマン講読** 第８回	• 講師：馬場靖雄	酒井泰斗	東大本郷	主催
20180616	**金子良事** **単著執筆準備作業進捗報告会** 第８回	• 金子良事（社会政策・労働政策）	酒井泰斗	学習院女子	主催
20180609	**行政社会学研究会** 第11回例会	• 資料提供：園 康晃、開田奈穂美	酒井泰斗	東大本郷	主催 ・司会
20180604 20180507 20180402	ルーマン解読講座７（全３回） **長岡克行さんと『権力』を読む**	• 講師：酒井泰斗、長岡克行（経営学）	朝日カルチャーセンター新宿	朝カル新宿	企画 ・講師

講師自己紹介3 出版1

ワードマップ エスノメソドロジー	概念分析の社会学	エスノメソドロジーと 科学実践の社会学	概念分析の社会学2
教科書	論文集	邦訳	論文集
			
新曜社 2007	ナカニシヤ出版 2009	勁草書房 2012	ナカニシヤ出版 2016
出版社との交渉、企画、人選、出版準備研究会運営、執筆	出版社との交渉、企画、人選、編者、出版準備研究会運営、執筆	出版社との交渉	出版社との交渉、企画、人選、編者、出版準備研究会運営、執筆

成功しすぎて足が抜けなくなった。いまは反省している。そろそろ音楽制作に戻りたい

講師自己紹介4 出版2

自分が読みたい本を他人に書いてもらうお仕事。

社会の音響学 ルーマン派システム論から法現象を見る	市民的自由主義の復権 シュミットからルーマンへ	現代形而上学 分析哲学が問う、人・因果・存在の謎	ワードマップ 現代現象学
毛利康俊	小山 裕	鈴木生郎ほか	植村・八重樫・吉川ほか
勁草書房 2014	勁草書房 2015	新曜社 2014	新曜社 2017
出版社への紹介	出版社への紹介	出版社への紹介	出版社への紹介

講師紹介5 ブックフェア

酒井泰斗プロデュース
いまこそ事象そのものへ！――現象学からはじめる書棚散策 http://bit.ly/201708fair

- 紀伊國屋書店新宿本店、2017年8月～9月
- 選書者：
  村田憲郎、小手川正二郎、植村玄輝、八重樫 徹、吉川 孝、富山 豊、吉川 孝、森 功次、佐藤 駿、武内 大、宮原克典、新川拓哉、池田 喬、前田泰樹、葛谷 潤
- POP推薦者：
  飯田 隆（哲学）、酒井泰斗（会社員）、田口 茂（哲学）、田中彰吾（心理学）、糸谷哲郎（日本将棋連盟 棋士八段）、古田徹也（哲学・倫理学）、岡本源太（美学）、加藤秀一（社会学）、吉良貴之（法哲学）、戸田山和久（哲学）、中山洋子（看護学）、納富信留（哲学）

ほかにも

- 2014年　実践学探訪――概念分析の社会学 エスノメソドロジーからはじめる書棚散策 http://bit.ly/201403fair
- 2015年　社会のブックガイド――ルーマンからはじめる書棚散策 http://bit.ly/201503fair
- 2016年　socio-logic――概念分析の社会学 エスノメソドロジーからはじめる書棚散策2 http://bit.ly/201604fair
- 2018年　「信頼」からはじめる書棚散策（準備中）

自己紹介b：現象学に対する愛と悪意

- ある時期以降、現象学の本をほとんど読まなくなりました
  - だって現象学者は「事象そのものへ向かう分析」しないから・・・
  - だいたい同じもの読んでるはずなのに関心が違いすぎて話あわないし。長き孤独は解消されそうもない(?)。
- 愛と悪意
  - 哲学界の最大派閥としての現象学派に対する愛憎。
  - そして『ワードマップ 現代現象学』に込められた愛と悪意。

- 今日は？
  - 「中味を盛る器」を作るのが講演者の芸風。
  - 今日も現象学者の皆さんに仕事を作りにやって来ました。
    - 真面目に考えると回答にたぶん数年間かかる宿題です。

2. 本日の目標と予備考察

2a. 準拠問題：出発点

- 『ワードマップ 現代現象学』企画時の課題：
  - 記述的解明と公的な議論を通じて哲学研究を前進させること。
- 問：研究同業者との継続的な議論・検討を行うためにはどのような道具立てが必要なのか・利用可能なのか。
  - 回答例：通常の哲学者の流儀は**「理論構築」**。多くの経験的研究分野では「モデル構築」
    - 理論：命題の集合——一般性・無矛盾・整合的。
- それはそれでよいとして。しかし代替策はいくつ考えてもよい。ほかに回答案はないだろうか。

※一般論

◆一つの課題に対する答え方は複数あるのが普通。

◆代替策がある場合、どれかを択一的に採用することもできるが、そうしないこともできる。択一的選択を行わずに、組み合わせて使って個別の道具にかかる負担を下げることもできる（代わりに研究のマネジメント課題は増えるけど）。

2b. 提案：資料への着目

- 管見の限り、哲学者は、研究の道具立てに関する方法論的議論をほとんど行わない。
  - 例外は「直観」くらい？　「実験哲学」は、それに対する反省？
  - それもそれでよいとして、他にも途はあるのでは。（実験哲学はあまり現象学向きではなさそうだし）
- 議論・研究の検討を相互に行うための手段としては、資料に着目する方向性もあるはずだ、というのが本日の提案。
  - 理論が研究の目標であるのに対し、資料は研究の土台・足場。
  - 誰でもアクセスできて・共同的に繰り返し吟味することができ、研究の前進を判断する材料にもなりうる。この点では、「理論」と同様の役割を担える。
- そうだとすると、現象学者が使える資料タイプを増やせるなら、また **研究実践 - 資料 - 共同的検討** の関係を適切に組み立てられるなら、より柔軟な研究が可能になるはず。

「理論」に仕事を担わせすぎることも防げる（～理論への負担を減らすことができる）

2c.「現象学者にも使える・扱える」という難問

- 「使える・扱える」には二つの側面がある。
  - a. 現象学のポリシーに反しない
  - b. これまで資料について考えてこなかった人にとってもハードルが低い。
- どちらも大事。だけど・・・・。
  - 一方で。既存の「現象学的」と称するフィールド研究を見る限りでは、でかいこと狙いすぎ。ポリシーと実際の飛躍が大きすぎ。安易すぎ。
  - 他方で。a の周辺でグルグルしてるひとも多そう。
- とりあえず今日のところは。
  - EMはものすごくたくさんの資料タイプを扱ってきた。とにかくそれを見せるので、まずは b に集中してほしい。
    - そもそも「扱えそうにない」ものについて、その権利を考えても無駄なだけ。

2d. 明日から考えてほしいこと1

一方で。

- EMが多様な資料を扱えるのは、EMが対象（＝ひとびとの活動や行為）に寄食して行われる研究だから。
  - 人々の活動や行為は多様なので、それに合わせて多様な資料が生み出される。
- その資料（～データ）の多くはフィールドに出かけて取得されるものだが、そうではないものもたくさんある。そして、一方の研究を行う際も他方の研究を参考にできる（している）。
  - ビデオカメラを持ってフィールドに出ていく哲学者の数はもう少し増えてもよいとは思う。だがそれが最重要ではない。
  - フィールドに出ないタイプの研究でも、出ていくタイプの研究を参考にできる、ということが重要。様々な資料のスペクトルのもとで捉えられたときは、安楽椅子型研究の意味も変わるはず。

2d. 明日から考えてほしいこと2

他方で。

- EMが多様な資料を扱えるのは、EMが対象（＝ひとびとの活動や行為）に寄食して行われる研究だから。
  - EMが活動や行為を研究するのは、それが社会学だから。
    - ならば、「一人称の経験に定位する」と称する現象学には、同様のやり方は無理なのだろうか。（→a ポリシー問題）
- 結局は、「どこか」でこの問題について考えなければならない。
  - しかしこれはいったい何について考えることなのか。
  - ➢ これこれでたぶん／やはり、「現象学とは何なのか」問題を含むかなり根本的な検討を要することになるはず。
- しかし。
  - この問題も、多様な資料を使った研究を素材として、それらの一つ一つを吟味する形で進められるはず。
    - その意味で、現象学者にとって、EMとの対話は長期的に見てメリットが大きいはず。

2e. 今日考えてほしいこと

- これから、様々な研究の断片を見せる。
- 持ってきたのは、個々の論文においては、a.資料を提示して b.そこに若干の敷衍を行うところ。
  - どの論文も、c.そこからさらに分析を進め、d.なんらかの洞察にたどり着き、e.論文の結論へと至るわけだが、その部分は持ってきていない。
  - この報告で見てほしいのは、「その研究の面白さ」ではない。
    - その方向での議論は、前田報告で。
- 資料断片を見ながら、それぞれについて次のことを考えてみてほしい。
  - どんなタイプの資料なのか。
  - その資料に対して行われた「最初の一歩」となる敷衍の部分は**まね**できそうか。
    - 敷衍部分が**まね**できそうでなければ、その資料を使うのは難しい。

予備考察：研究実践における資料の位置

- EMを視野の中心において、データメイキングとその利用にかかわる形で研究実践を分節化すると、こんな感じになりそう:

①研究したい主題

②主題に関わる現象

③現象に関する入手可能な記録

④記録するための技術的媒体

⑤記録のうち、直接に分析にかけられる部分

⑥ ⑤を分析する際に使われる方針、理論、手法、技術など

例:論理分析
- 分析される「文」が⑤
- 述語論理学が⑥

例16:岡沢「フィクションの分析可能性」
- 映画館で映画を見ていたら、特定の場所でみんなが(自分も)笑った(②)。
- 笑いが起きたのはメタフィクション(①)にかかわるものだったから。
- 帰宅してからネットで検索してみたら(④)、脚本が公開されていた(③)。
- そこで、なぜ特定の個所で笑いが起きたのかを、脚本の当該箇所(⑤)を出発点にして考えてみた。

※おそらくこういう発想が哲学分野にはない(?)

3. まえふり

a. シュッツ・現象学的社会学とエスノメソドロジー

今日はその話はしません。

- 80年代～90年代はみんなでそんな話ばかりしていた。でも最近では話題に登ることもなくなった。
  - 「現象学社会科学会」(1984～)の時代

※ご参考：山崎敬一(1991)「主体主義の彼方に」

ガーフィンケルとシュッツの関係を考えるとき、重要なのはガーフィンケルには彼自身の理論的課題と問題関心があったということである。そしてその理論的課題と問題関心を達成するために、

- ガーフィンケルはシュッツのある部分(例えば**日常的解釈**や**類型性**の問題)をある意味ではシュッツ自身を越えて深く読み込んだ。
- そして別の部分(例えば、**社会科学方法論**の問題や**内的時間意識における意味構成**の問題)は、そのままの形では彼の理論、すなわちエスノメソドロジーの中には取り込まれなかったのである。(239頁)

- この延長線上で研究をブラッシュアップしていくことは可能。でもそれでは風景は変わらない。
  - そもそも現象学とEMの実質的な交流がないのだから、いまやこういう研究を誰も必要としていない。

3. まえふり

b. Harvey Sacks の まるで すごそうに見えない
幾つかのアイディアについて

3b. Harvey Sacks の着想

- ガーフィンケルと並んでEMCAの「始祖」と称される。
- ガーフィンケルの知的背景が現象学にあったのに対し、サックスの関心は論理学や生成文法など、やや異なった方向を向いていた。
  - 学部は法学。
  - 若くして亡くなったため公刊物は少ないが、死後刊行された講義録(1500頁超)に散りばめられたアイディアの数々が後進によって展開された。
  - MCDや会話分析もサックス由来のアイディアを発展させたもの。

→資料集付録

1. 子どものお話の分析可能性
2. 〈置いてあるもの／捨ててあるもの〉
3. 順番交代システム

Harvey Sacks (July 19, 1935 – November 14, 1975)

- Gail Jefferson eds., *Lectures on Conversation*, Blackwell Pub., 1992.
- H.サックスほか『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』, 世界思想社 , 2010.
  ※アメリカ言語学会 *Language* 誌に掲載された論文中で最も多く引用された論考。
- G. サーサスほか『日常性の解剖学—知と会話』, マルジュ社,
- H. サックス,「社会学的記述」, 成城大学『コミュニケーション紀要』24, 81-92, 2013.

1のちょっとした展開：『サウンド・オブ・ミュージック』（1965）

ジュリー・アンドリュース扮する主人公の家庭教師マリアが、教えている子どもたちについて、クリストファー・プラマー演じる厳粛な父親トラップ大佐と口論になるシーンである。（この写真は残念ながら別のシーン）
子どもたちのために遊ぶ時用の服が欲しい、というお願いを大佐にはねつけられたマリアは、次のように懇願する。

（M1）マリア：でも彼らは**子ども**です。

（T1）トラップ大佐：その通り。そして私が**父親**だ。

*出典：西阪 仰（1997）『相互行為分析という視点』pp. 83-84.

カテゴリーの集合・人の集まり・ルール

(M1) マリア: でも彼らは**子ども**です。

(T1) トラップ大佐: その通り。そして私が**父親**だ。

M1 における「子ども」

T1 における「子ども」

- どのようなクラスにおける・何から区別されるかによって 言葉の意味は変わる。
- カテゴリー集合を切り替えると、それが適用される人の集まりも変わる。
  - 〈子ども–大人〉から〈子ども–親〉に切り替えると、**マリアは集まりから除外される**。
  - ここでは権利関係も切り替わっている。
- カテゴリー・語彙・概念を、それとして扱う研究はもちろん可能である。しかし、あるカテゴリーがどのような活動と結びつくか(どのような活動を可能にしたり制限したりするか)といった観点からカテゴリーについて研究することもできる。
  - そうした研究は哲学や概念史と似ているが、違うところもある。

4. 本論：資料のバリエーション

例1〜3：①八重樫、②植村、③吉川

- どれも「想起」に基づく反省？
  - でも、正確に同じことをしているわけではない。
  - 「反省」、広すぎない？

- 気になること。
  - 読者に何かを想起させるとき、著者は何をやっているのか。どうしてそんなことができるのか。
  - 著者は、何を頼りに議論のデザインをおこなっているのだろうか。
    - そこで「頼りにしているもの」は、読者の側でも頼りにできるものだと想定されているはず。
      - それと「一人称の経験」との関係は？

例4〜6：現象学的心理学三流派

- 他人の「一人称的経験」に定位すると称して**インタビューや伝記、自己報告**などが使われている。
  - これが許容されるのであればビデオを録ってもよさそうなもんですが。
- 〈いま-ここ〉の無駄な強調
  - 研究に足枷をかけるもの。
  - 〈いま-ここ〉の使い方・捉え方が間違ってる。

「批判的ナラティブ分析」disが入っていました（検閲済）

- これらのデータと例1〜3 における「例示」の違いは？

例7～8：比較対象項「発話プロトコル」

※二者比較はよろしくないので「行動科学 vs. 認知科学」という比較参照項を挟んでみる。

- 発話プロトコルを使って大きな業績を上げたのはハーバート・サイモン。
  - 問題解決プログラムを考案するときに準備のために使った→AI研究と認知科学の出発点。
- 心理学の訓練を受けていないものにとって、発話プロトコルの利用は自然な発想。（サイモンの出自は行政学）
  - 今日持ってきたのはランド研究で数学者と経済学者がやっていた自然発生的な社会心理学実験。
- 他方、行動科学的心理学者にとっては、「使ってはならない」タイプのデータ。
  - 心理学が使うべきなのは客観的な行動データ・生理データ。
    - ランド研と同じくゲーム理論を使った社会心理学実験を設計したモートン・ドイチェはプロトコルデータは使っていない。

例9〜10：ギュルビッチの点と会話の分析

- 例9 はガーフィンケルが明確に現象学を出発点としていた地点の一例。
  - この付近に「見る・見える」に関する膨大な研究がある。
    - ある側面は現在のEMにも引き継がれている。

- 例10 は、EMのパブリックイメージに近いだろうもの。
  - そして、現象学者にとっては かなり距離を感じるであろうタイプの研究。
    - 「その理由がなんなのか」こそが重要なのだが、おそらくこのタイプの研究だけを見ていても埒はあかないはず。
      - 「フィールドにでかけてビデオ撮るのたいへんそう」ということに由来する「距離感」も大きそう。
  - しばしばこうしたビデオを使った研究に対しては「客観主義的」との嫌疑がかけられる。
    - それより多いのは、議論なく毛嫌い・敬遠されること。
- 例：ラングドリッジ

ラングドリッジ（2007→2016）『現象学的心理学への招待』

質的社会心理学はインタビューに依存する傾向がある[2]。

(2) もちろん例外はある。会話分析は自然に観察される会話を優先し、インタビューを極力避ける。ただし会話分析ではトランスクリプトより録音テープが分析の焦点になると言っても、言葉が記録される過程がある以上、話者の意図は抹消されるのである。プラスチック製磁気テープへの記録か、ペンによる紙への記録か、記録形態の違いがあるにすぎない。対話する二人にとっての、「ここ」と「いま」がどこかに行ってしまうことには変わりがないのである。（訳64頁）

例11：独り言を録音して書き起こす

- 認知科学で「発話プロトコル」と呼ばれるもの。
- 現象学者による考察の出発点にしやすそう(?)な例かも。
  - 「独り言の記録」という点では「回顧録」や「日記」などに近い(?)。
  - しかし技術的媒体で客体化されている点が違う(?)。——って、何が違うって？
  - そもそも活動の種類が違う。

- データメイキングの手段としてはものすごく手軽。

例12〜14：フィールド研究（録画とノート）

- 13は伝統的な人類学などと同様のやり方
  - ただし、録音録画するときにもかならずフィールドノートはつけるし、録画物の分析の際もノートは併用する。
    - ちなみに今回インタビューは例に含めなかったがやっているひとはいる。
  - これも例1〜3 とちょっと似ている？

- 12もEMのパブリックイメージに近いか。

- 14はフィールドにおいて参与者たちが使っているツール（ここでは実験マニュアル）の使い方を分析したもの。

例15〜16：他人が録画したものを分析する

- 15は YouTube にアップされていた柔道試合の動画をめぐって、柔道家を集めてデータセッションをおこなったもの。

- 16は脚本と映画、観客の反応を見ている。

例17〜20：イラスト。公式文書。書籍

- 18と19は写真やイラスト。
  - 「見たらわかってしまう」水準の事柄。非推論的。

- 17は審議会記録。20は偉い人の著作。
  - 20になると、ほとんど哲学や思想史と（使用資料の）距離がなくなる。
  - EMにおいて、17や20のような仕事がフィールド研究と同様のスタンスでできていることの意味を考えることは、哲学にとっても何らかの意味で役に立つのでは。

5. 現象学者たちへの宿題

1. あなたが読者に向けて文章を書ける(デザインできる)のはなぜですか。
   - そのときにあなたが頼りにしているもの、あなたの執筆活動を合理的なものとするために支えとなっているものはなに？
     - それに対して現象学的分析を行うことはできる？
2. 〈一人称／三人称〉のような区別～特徴づけは、〈現象学／自然主義〉のような特殊な対立軸のもとではある程度うまく働くかもしれない。でもEMは切れなさそう。
   - もうちょっとなんか他のことも考えてほしい。
3. それだけでなく、研究の足枷になっていないだろうか。
   - たとえば「内在的」というときに、「一人称的な経験」への内在しか想定されていないと、「**何への**内在なのか」が問われないで済まされがちになるのでは？
     - ミシェル・フーコー症例
4. 近い将来に、「何らかの資料・データに対する分析にもとづいて議論・相互検討を進める」やり方を考えて。
   - 話はそれからだ。でも実現すれば甚大な効果を持つのでは。